

---

# ~ 武偵高 ~ 眼帯の紅

大大日本

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武偵高〜眼帯の紅

### 【Nコード】

N4025V

### 【作者名】

大日本

### 【あらすじ】

武偵高〜紅い目の副小説です。

紅い目を見ていなくても、楽しめる作品なので、是非！

紅い目の主人公の兄「刀間封示」

一族を追い出され、仲間と逃亡中に、「悪魔」に襲われ友人を失う。

「悪魔」表側の顔は、武偵高強襲科、Sランクエース武偵「不羈荻打」

彼は、「悪魔」と交戦するが、相打ちに終わってしまい国からの「監視対象者」になってしまう。

彼が名乗ったのは、かつての友人「水ノ風月鍍」

く武偵高く紅い目より、いい感じに仕上がっています。  
来示の兄の正体が明らかにならな！

## 一部 聖裁（前書き）

さーて始まりました。「武偵高」眼帯の紅  
文字数少ないかもしれませんが、ご勘弁を；

## 一部 聖裁

〈刀間封示による聖裁〉

そう。武偵を崩壊へと導く人材は、確かに存在していた。

「刀間封示」

消滅したはずの一族を裏切り、世界を敵に回し「狂陥」に堕ちた少年。

「全世界共通の恐怖」

その少年は、主に雷による殺人的超能力を使う。

「刀間封示」が、世界に「危険な存在」を知らしめた出来事がある。

日本で起きた「武偵部隊全滅悲劇」

その「悲劇」を開放しよう。

「うわ。こりゃあヒデえ。」

夏の日差しを受けながら、頭を刺激するような異臭を放つ、不自然死体の現場保存をする。

「顔と足を真つ二つにされりゃあ、身元確認はキツイなあ。なつ、勇也。」

現場保存に努めている少年が、隣で死体の解析をしている、勇也と  
言う少年に話しかけた。

「そうですね。それにしても、終わりませんね、超能力人間狩り。」

「ああ。武偵はお手上げってとこかな？」

「お手上げって……。それを調査するのが「不羈茨打」と言う人でしょう？」

勇也が言うと、少年は爽やかに、苦笑いをした。

苦笑いをした少年。「不羈茨打」（ふきさやだ）は、最近の超能力人間狩りの調査責任者である。ちなみに、調査している20人あたりの人間は全員、高校生だ。

その事件は、当然のように捜査は難航した。

そう、思われた。

第一現場から5kmほどの所で、水に浸かっている、感電し、刀のような刃物に刺されている死体が発見されたのだ。

しかし、これは超能力人間狩りの事件ではない。

そう、誰もが確信した。

死因は、超能力による致命傷ではなく、強力な電子砲による「感電死」なのだ。

その、感電死から考えられるワードは、「刀間封示」

その後は、誰もが予想しなかった、敗戦の連続だった。

刀間封示の場所を探查し、襲撃した武偵部隊は、なすすべなく、中学三年生独りに壊滅させられたのであった。

NEXT!!!!!!

〈不羈莢打による聖裁記録〉



## 一部 聖裁（後書き）

意味不明箇所が結構ある小説です。

もやもやしたら、感想へGO！

二部 聖裁記録(前書き)

文字数少ない・・・？

## 二部 聖裁記録

く不羈莢打による聖裁記録く

(武偵は、超偵に勝てない。か……。)

莢打は、目の前に置かれている、部隊編成書を読んでいた。内容はこうだ。

A 部隊	重装備突撃部隊	構成隊員二名
B 部隊	高火力装備部隊	構成隊員八名
C 部隊	軽装備援護部隊	構成隊員六名
D 部隊	対超能力用部隊	構成隊員二名
E 部隊	武偵局専門部隊	構成隊員二名

この、中規模部隊で「大地電磁砲拘束の封示」を射殺もしくは拘束に向かうのだ。ちなみに、この任務は武偵局からの依頼だ。射殺許可も、もらっている。

武偵局からの依頼なので、専門部隊が派遣された。本当なら、もう少し人数はあるのだが、既に展開された、刀間封示との戦闘で、人手が不足しているらしいのだ。この戦闘は世間には公開してないが、

莢打はC部隊配属の、部隊隊長だ。

見た目とは考えられないが、強襲科Sランク武偵なのだ。

「あの、茨打さん？」

「あ、ああ。襲撃か。」

「はい。全部隊配置に付きました。」  
今は、目標が居ると思われる洋館の前にいる。

「よし。では、現在23時54分に襲撃を開始する。前線A部隊による体形Uを保ち、襲撃を開始しろ。」  
A部隊を前線に洋館に突入するとき、爽やかな苦笑いを含んだ顔は、話しかけた少女に言った。

「今すぐに、超能力捜査研究科と連絡を取って、部隊を送ってくれ。到着までコッチで時間を稼ぐ。部隊が壊滅しても……。」

「えっ?! なっ、それはどういう意味で! ……。」  
少女は叫んだが、相手には伝わらなかつた。  
その時は小学生だった、その少女は、背後に設置された本部に走つた。

「樋田宇美」その少女は。

NEXT!!!!!!

く不羈茨打と刀間封示による交戦記録く

## 一部 聖裁記録（後書き）

意味不明箇所は、感想にて返信します

### 三部 聖戦

〈不羈莢打と刀間封示による交戦記録〉

悲劇は、突入開始から始まった。

A部隊が洋館入口のドアを叩き開けた、と同時に蒼く黄色い閃光が飛び散った。

目を開けると、A部隊の二名が足を痙攣させながら、失神していた。対電流仕様の装備な為、死にはしないが戦闘は行えない。

「平気だ。構わず進め。」

莢打が声をかけると、部隊は前進を続けた。

奴の場所は分かっている。

二階の206号室。突入前から、窓越しからでも分かるような電流が流れていた。

その後は、何の仕掛けはなく、難なく206号室前に、着くことが出来た。

B部隊同士で瞬き信号でドアの前に立ち、叩き破る。

バババババンッ！！

同時にライフルが火を噴く。

ガスンツ！！ビシャアアアンツ！！

砂袋に当たったみたいな音がしてから、瞬間に蒼白に包まれる。

人影が、9mm弾パラベラムに、爆ぜた。

人影が、消えて、蒼光を發した。

蒼光を放ったのは、電子による人形。

（はめ、られたっ！！）

囷に遣われた人形が放った、蒼光に部隊員達が吹っ飛ぶ。

ズジャアアアン！！ザアツ！！ザアツ！！

立ち上がった隊員は、本物による追撃に、再び倒れてく。

(ク、ソツ!!)

身体全体が痺れて、動けない。

ズザアアアツンツ!!

まだ周りでは、蒼光を含んでいる。

こういう結果を招くのは、予想は出来た。だから、樋田に超能力捜査研究科を呼ばせておいた。

「武偵は超偵に勝てない」

相手が強くとも、総勢でかかれば生けるだろう。

今は静まり返った場所に、やっと動くようになった首を後ろに回す。

「大丈夫ですよ。魔力解放を使っても。」

静かだった場所に、透き通る声が響く。

「貴男が遣えていた奴は、天界に送りましたし、盗聴器は破壊させて頂きました。それと、貴男が無限体力、及び魔力解放を使えるのは知ってます。超能力人間狩りの犯人だと言う事も。隠すことなど無いでしょう?」

奴は、俺だけに言った。

刀間封示は。

N E X T ! ! ! ! ! ! !

く不羈茨打による一族狩りく

## 四部 聖戦記録

「不羈茨打による一族狩り」

「だから平気ですって。貴男が超偵の顔を持っていることも知ってますよ？ああ、貴男は超能力人間狩りを気にしてるのかな？大丈夫ですよ？僕の言葉を人間は信じませんから、貴男に直接被害はいきません。」

目の前に居る悪魔、いや、天使は喋る。

「………………。何が、言いたいだ。」

「言いたい？言いたくないじゃないよ？君が見たいんだ。貴男ではない君が。」

「………………。」

「月鍍を殺したのは君でしょう？」

「………………。」

「君の解放条件は『欲求の不満』からでしょう？」

「………………。」



す。」

「ゲハハツ!!第一形態では、てめえを殺すのが任務だ。光からみた『悪魔』は『救世主』になる。分かるか!?『悪魔』が『救世主』だぞ!アホにも程があるよな!ゲハハツ!!」

もはや、優等生である茨打の『顔』など残ってなかった。居るのは『悪魔』のみ。

(それを斬る!)

もうどっちが悪で、どっちが善か区別がつかない。

「斬るッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

封示の大刀が振り落とされる。

「させるかあああああッ!!!!!!!!!!」

茨打の構えた手から、紅い焰が迸る。

?????洋館で紅と蒼が対立した

NEXT!!!!!!!!!!

く天使と悪魔による対立関係く



## 五部 聖裁聖戦

「天使と悪魔による対立関係」

洋館に紅と蒼が対立した。

まさに悪魔と天使。

見た目と事情がズレすぎている。

悪魔が素手で、天使が大刀。

「はあああああッッ!!」

ガウウウウンッ!!

「ハハッ!!その程度かああああああ!!」

ザアアアアウウウウウンッ!!

天使が悪魔の紅光を、刀で受け流す。

「ガアアアア！！」  
後ろに飛び退き体勢を整える。

「クツ。なあんだ、天使さん口だけじゃ無いんだあ？耐えられるんだあ。」

「ツクソオツ！！」

「ふうん？つまんない。終わらせる。」

「ナツ！！」

封示が驚くも当然。悪魔の手から、焰が形を変え、紅い大鋏みが出現したのだ。

しかも、刃の部分が80cm程で、両刃。

妙に、悪魔に似合っていた。

「は、鋏み？！」

「俺の第一武器『バックバイター咬嚼』。天界の主要危険刃物に載ってたと思うが。」

「な、何故、それ、を！！！」

「ああ？第一武器と言っただろう。」

「ッ！！」

封示が後ろに後ずさった。

「はあ？怖じ気づいたか？」

「解放する。刀間の裏切りに掛けて、友の死に掛けて。刀間の聖祭の《悪魔狩り》を解放する。《悪魔の殲滅》に貢献せよ。解放しろ。」

封示の体全体に蒼い魔法陣が出現した。

「コレが僕の『魔力解放』誓いの聖唱で発動できる。」

その言葉に、悪魔が笑う。

「良いじゃん。コレで対等に殺れそうだ。お互い、切り札は残っているようだし。」

ぞっとするような笑みが浮かんだ。

「あーせっかくの交戦だけど、時間切れだ。次回にお預けってところかな?」

「時間切れ?」

「そう言うこと。」

ずおおおん!!

「ナツ!!」

縛られた。何処からか張られた無数の楔に。

「早かったな。もう少し、時間がかかると思っていたが。闇に悪魔が呟く。」

「茨打が急かしたんでしよう!! 超能力捜査研究科の全勢力を、要求してくるなんて!!」  
闇から、若い女性の声がした。

「悪いな。コッチは全部殺られた。」

「ぜ、全部?!」

「うがアアああああああ!!」

封示は楔に、出来る限り抵抗した。  
電流を流そうとしたが、電流仕様に成っていて流れなかった。

「ちよつ、ちよつと茨打。私一人なのよ? 拘束手伝って。」

「了解した。」

悪魔が、一気に封示の方に、攻撃態勢で詰め寄った。  
咬撃はいつの間にか消えていた。

( 奴が、その気なら…………… )

いざの時、抵抗できるように拘束されたかのように、隠しておいた右手を前に出した。

「ナツ!!」

悪魔が、封示の手に出現した雷刃を見て、絶句した。しかし、スピードに乗っていた悪魔は、止まらない。

「……………ツ!!!!斬るツ!!」

バズシャアアアアアアあああ!!

雷刃から鮮血が散った。

ズシャアア!!

二撃目。また紅が迸る。

「茨打ツ!!」

闇から叫ばれた、悲鳴の後に悪魔の方から何かが光った。

封示の身体に寒気が走った。

光ったのは、茨打が装備していた、サバイバルナイフ。

それが、封示の胴体に刺さった。

洋館にもう一度、鮮血が散った。

紅と共に二人の、少年の意識も散っていった???

NEXT!!!!!!

第一章 神に祝福されし少年

## 第一章

封示が意識を戻した場所は病院だった。

(ど、何処だ？ここ。)

封示はベッドに寝かされていた。窓には鉄格子が取り付けられていた。病室と言うより、隔離施設を連想した。

「ぬがあッ！！」

身体を起こそうとしたら、腹に激痛がはしった。

腹を見て、今までの記憶を取り戻した。

あの、『悪魔』不羈茨打との戦闘。その戦闘で腹に負傷したことを。

(って事はここは施設なのかな？)

まあそれが通りだろう。

指名手配犯だったのだから。

(そう言えばあの悪魔、殺せたかな？)

封示は、悪魔を殺す一心で最後に、不羈に雷刃を振るったのだ。脳天目掛けて。

ただ、正確に斬れたのかは分からない。

楔に縛られていたので、実際少しづれていた。

否や、あの楔は誰が放ったのかも気になった。

動けない自分の身体に、溜め息し、眠りにつこうとしたらドアが開いた。

身を固まらせドアの方を向いた。

そこには、黒い眼帯をした見慣れたアイツが立っていた。

「うち。生きてたのか。」

不羈に舌打ち混じりで話した。

「君こそ生きてたのか。」

不羈は苦笑いをしてそう答えた。

「それはそうと、コレ読んどけ。」

茶色い封筒をベッドに投げてきた。

「……………。司法取引か？」

司法取引なら、今茨打の態度の辻褄が合う。

「そうゆうことだ。おまえの通う学校は、多分武偵高だろうよ。」

「えっ…!」

武偵高と聞き、驚いた。僕は中三だぞ？

「じゃ、そうゆうことで。」

驚く封示を、まるで気にせず、手をひらひらさせながら部屋から出て行った。

(アイツ眼帯してたな。)

多分、運悪く眼球をえぐったのだらう。

鼻の左側も傷跡が出来ていた。

布団の上の書類を見て、軽く溜め息をついた。  
司法取引については問題ない。

今は、一族も追い出された身だ。  
心配される事もない。

金も、国が負担してくれるらしい。好都合だ。  
ただ、問題がある。

武偵高だ。

さっき考えていたように、僕は中三だ。武偵校中等部じゃないのが  
不満だ。

多分、周りを中学生より高校生で埋めておいた方が、監視に困らな  
いからだろう。だからって、中学生を高校生と偽るのもどうかと  
思うが。

その後は、モニター越しから監視していたらしき人物が武装して、  
三人で病室に偵察しに来た。

そのおっさん達は、武偵局の職員を名乗っていたが、襲ってくる気  
配が僕からしないせいか、安心して見るように見えた。

事情を聞こうとしたが、どうやら口止めされていた。  
おっさんが言うに後もう少しで国のお偉いさんが来て、色々教え  
てくれるはずらしい。

それは正しくて、おっさんが司法取引の茶封筒を持って行った直後に、黒いスーツで、長い黒髪を後ろで結んで強面の男性が入ってきた。

「具合はどうでしょうか？刀間殿」

無表情で聞いてきた。さすがに無視することは出来ずに、

「まあ、何とか……………？」  
と答えた。

「そうですか。それは良かった」

男は無表情を保ったまま、全然良くなさそうな口調で言った。うう、やりにくい。

「貴男は国の方で？」

いきなり、疑問を投げ掛けてみた。

「はい。刀間殿が武偵高で異常な動きをするか監視する、監視役のさきつきなにと紗季月なつづき椰伊都です」

「椰伊都さん？」

「はい。言わば、刀間殿の護衛役です」  
変わらず、無表情で語る。

へえ。椰伊都ね、珍しい名前だ。

どうやら、眼帯の悪魔は、正しいことを言っていたみたいだった。

本当に、高校につれていかれるみたいだった。紗季月さんの監視付きで。

授業などは、聞かなくても平気で、定期テストなどは、学校側がどうにかしてくれるらしい。全く、美味しい話だ……？

しかし、戦闘技術の授業は、しっかり受ける。とのことだ。

紗季月さんの話を聞いていて、だいぶ分かってきた。

刀間封示と言う人材を、国が教育して、遣おうとしている。

紗季月さんが帰り、一週間が経ち、医者から説明を受けた後、紗季月さん同行で退院した僕が、向かわされた場所は、もちろんそこだった。

「水ノ風月鍍みずのかげつきとです。よ、宜しく御願いますッ」

それは、

クラス中の視線を釘付けにした偽りの少年の、武偵高での第一声だった。

N E X T ! ! ! ! !

第二章 偽りの月鍍

## 第二章

「だあああああああ！！！！どいてくださあいいいいいいいい！！！！！！！！！！」

今は放課後。

一人で、用意されてあった家に変える予定がなぜか狂って、15人程の男女に囲われて下校中だ。

この状況より酷かった学校よりは、人数はだいぶ減ったが、まだこれでも近所迷惑だ。

困っている理由は虐めとかじゃない。

僕を、学科にスカウトしているのだ。はっきり言って、いい迷惑だ。女子の方が人数が多い。僕がたらしと勘違いされたらどうするんだ。

「車軸科なら、サー・ビ・ス・つけるよお」

「えっ。ならッ探偵科は、私が着いてくるよ」

「ナツ！！情報科なら、エロ本が特別に、三冊！！付いてくるぞ！！」

「どれもいらねええええええええええ！！！！」  
意味わかんねえ！！僕は不幸体質だったけか！？

不幸だ！不幸すぎる！！  
転校初日から、早速不幸だ！

「お願いです。帰ってください！！！！」

歩道上だからって関係ない。歩行者に変な目で見られても構わない！コイツらを追い返せばいいのだ！！

「そんなこと言わないでさあー。一緒に帰ろうよあー」

「って、勝手に付いてきてんのは貴方達でしょうッ！！」  
事情が事情だ。ナンパされてることを素直に喜べない。

「そう遠慮すんなって。素直に強襲科に来いよ？なっ親友？」

「今日初めてあつた人が親友なのッ！！おかしくない！！」

「ねっ、メアド教えてよ！いつでも遊んであげるからさあー？」

「初対面の人にそんなこと言われたの初めてです！と云うことでお引き取りを」

「ああ！逃げるなあー！」

裏路地に逃げ込んだ僕を、一斉に、逃げるな！と怒鳴りながら追いかけてきた。

その列が一気に乱れて、止まった。まるで、全員が怪物を見るような顔をしながら、僕の背後を見つめている。

「ふうん？水ノ風月鍍ねえ」

その背後から、聞いたことがあるような声がした。

「っ！？」

列が、蜘蛛の子を散らすような勢いで、逃げ出した。驚いて、背後を振り返る、

「それが、今のアナタの名前ね？」

その言葉を聞いて、思い出した。

「あの、戦闘以来ねえー？」

そう、対戦中に敗北の原因。あの、楔使いだ。敵と見るべきなのか？

「ああ。私は闘る気ないから、構えないで平気よ。」

「……………。貴女は何者です？」

「みて分からない？超能力捜査研究科二年のSランク超偵だよ？」

「鬼道術ですか……………」

「そつゆつことー。で、月鍍君の家はどこ？」

「……………。僕もよく分からないんです。住所しか教えられてないから」

「その住所は？」

「あ、コレです」

住所が書かれた紙を渡した。

「ふーん。そういう事ねー？」

「え？」

「ここに書かれている住所、私の家」

「はああ？」

「私は紗季さき月理づき逗夢とむ多分たぶんあなたはあつてると思っけど、紗季月さきづき椰伊なぐい都みやこは私の兄」

「……………」

「一緒にみたいだね」

「……………。ッいやあああああああああ！  
……………」

NEXT!!!!!!



### 第三章

「そうですかあ。理逗夢が刀間殿を拘束したんですか。拘束りますね。理逗夢のやつ……………」

「いや…。やりますね、じゃなくて。」

試合場らしき部屋には、格闘練習をはじめに、鬼道術などの練習者で溢れている。

「刀間殿を拘束するなど、どれぐらいの力が必要か。私も、楔一本じゃ無理ですよ。魔力解放時になると尚更。」

「ああ。だから……………」

あの時、楔が無数に飛び出したのか。

ちなみに、この試合場は紗季月家専用の練習場らしい。二階には、部屋が配分されており、五十人は不便無く生活できるらしい。

そうになると、ここに居る二十人位の人達は、全員紗季月なのだろうか？

そう考えていると、僕の表情に気づき、紗季月さんが説明してくれました。

「この八割は、紗季月の者ですが残りは、国からの監視対象人物です」

「なるほど。僕もその一人って訳ですね？」

「はい。刀間殿程の魔力は持ってないですけど、多少は闘れるんじゃないでしょうか。Gもそこそこですし」

「それを指導してるのが、紗季月さんですか？」

「まあ、そんなところです。コレでも紗季月の長男ですから」

「へえ。紗季月さんが？」

「お恥ずかしながら。ああ、榎伊都で良いですよ。」

「へ？」

「ここでは紗季月じゃ被っちゃうでしょう？」

「まあ確かに」

苦笑いを浮かべて言った。

「では、部屋まで案内させます。柚宇既。案内しなさい」

超能力戦闘の練習をしていた銀髪の少年の方を向いて、榎伊都さんは手招きした。

「ん？夜兄か」

「この方を、部屋まで案内しなさい。部屋は、確認させた通りです」

「了解。夜兄はどうすんだ？」

「私はちょっと出かけます。あとは頼みます」

そう言って、榎伊都さんは僕に会釈し、道場から出て行った。

「……………」

「おい。そこのおにーさん。確か、水ノ風月鍍って言うんだよな？」

「え？ああ、そうだけど」

「じゃあ、俺の兄貴だな。一つ上の」

「え？」

「月鍍だから月兄かな。他のやつにもそう呼ばれると思うぜ。姉貴から聞いているぞ。高一だったな」

「柚宇既と呼ばれた少年は、ニツ、と笑った。」

「姉貴？」

「ああ、理逗夢の姉貴からな」

「理逗夢さんか……………」

「じゃあ、月兄。部屋まで案内すつから着いてこい」

「そう言つて、柚宇既君は道場を抜けて階段のある中央に向かった。」

「馬鹿でかい階段の隣にある部屋を柚宇既君は指差して、」

「あそこが、食堂だ。家に居るときはそこで、食べるんだ。また、七時位に迎え行くから心配すんな。慣れるまで、俺がそういう役だからな」

「あーそうなんだ。もしかして、飯ってここに要る全員で食べるの」

……?」

「ああ。そうだけど、月兄そついうの苦手なのか?」

「……………。まあ、一緒に食べてた奴は、死んじまったからな……。そつ言つのは確かに慣れねえな」

「……………今口調変わった?」

「ん。ああ。そいつの口調を思い出したら、つい」

「死んだって、…………殺されたのか?」

「うん。ここが表なら、裏の世界で殺された」

「通りで。殺されたのが、水ノ風月鍍だろ?」

「なんだ。分かってたんだ?」

「月鍍って呼ばれるたんびに、表情が変わってたからな。懐かしい言葉を聞いたみたいに。本名は刀間封示だろ?」

「それも分かったのか。意外だな。司法取引での偽名が月鍍なんだ」

「そうか、ならこの事は伏せていた方が良さだろうな。理逗夢の姉貴も言ってなかったみたいだし」

「うん。そうしてくれると助かるよ」

「んじゃ行きますか。月兄」

そう言つて、僕を部屋に案内してくれた。  
その少年が、月鍍の正体を自力で暴いた一人目だった。

N E X T ! ! ! ! !

第四章 第二階段紗季月一族

## 第四章

柚宇既君に案内された部屋は、予想以上に広がった。

十人人部屋ぐらいの広さだ。電化製品は、どれも最新型だが、どれも普通の。部屋の広さと、何か合っていない気もするが……？

「食うもんは冷蔵庫の中に適当にはいつてつから。服とかもケースの中だ。ここにある物は壊しても構わないから、最大限遣ってくれんじゃ、俺は行くから分かんないことがあつたら言ってくれ」

「………………。ああ……………」

「んじゃな。また来つから」  
部屋の広さに半ば放心しながら、柚宇既君を見送る。

ふはあ。と、ベッドに倒れる。少し横になり今度は、端に置いてあるプラスチック製のケースに手を着ける。

「うわあ……………」

中に入ってたのは、外でよく見る普通（にしては派手）の服だった。

ちなみに、僕は服を、制服と修道衣以外に着たことがない。こういうのに袖を通すのは、ちょっと気が引ける。

まあ、着るべき時がくれば考えればいいだろう。……………うん。

「ハロー？水ノ風月鍍君」

「ふぎやあああああ！！！」

いきなり後ろから肩を捕まれた。ビツクリして後ろを向くと、大爆笑してる理逗夢さんと、初めて見る顔で、長い黒髪を後ろで束ねた美少女が腹を押さえて、ほんとに可笑しそうに笑っていた。

「り、理逗夢さんか…。脅かさないで下さいよ……」

「アハハハッ！ごめんごめん。コツチに気づいてなかったから、つい脅かしたくなっちゃった」

「ついつて……。で、何か用で……？」

「部屋に着いたって、柚宇既から聞いたから様子見にきただけー。ああ、この子は義妹の花菜芽<sup>かなめ</sup>あんたと同じクラスのはずよ」

「あつ、はい。紗季月花菜芽です」

そう言つと、少女は軽く会釈した。うーん。礼儀が良いなあ？

「水ノ風月鍍です。えーと…どっかで会いましたか？」

「いや…会つたと言うよりも、私が月鍍君を見かけたのかな…？」

「クラスが一緒だから当たり前でしょ！しっかりしろ！」  
理逗夢さんが、花菜芽さんの背中を、ビシッと叩いた。

花菜芽さんは、「ひゃっ」と声を上げ、僕の顔を見て頬を赤く上気させた。

「あ、あの、一つ聞いて良いですか？」

「ん、はい」

いきなり声をあげたので、反応が遅れた。

「…月鍍君は、どの学科に入るんですか？」

「……は？」

「い、いや、ちょ、超能力捜査研究科、に、は、入ってほしい、な、何て私は思ってますんよ！」

あー、思ってたのね……。

「おちついて。僕は、超能力捜査研究科に配属されるように言われてるんだよ。国の方から」  
花菜芽さんの目が輝いた。

「ほ、本当ですか！？良かったー……。皆に、困われて誘われてたから、つい……。」

「あら、月鍍も超能力捜査研究科？私達と同じじゃない」

「えッ？」

速攻で後悔した。この二人に着いてける自信がない。

「ほら、嬉しそうな顔しない。お父様の所に挨拶しに行くわよ。そのために向かいに来てあげたんだから」

「えっ、ちよつまっ！」

二人に、引きずられるようにして部屋を出た。

引きずられながら着いた場所は、和室。すげえ、広い和室。

「気に入ってくれたかな？水ノ風月鍍君」

視界に外れてた場所から、声が聞こえた。

そこに立っていたのは中年男性。顔立ちも、髪型も榎伊都さんソックリだ。

「連れてきたわよ。お父様」

隣の理逗夢さんが言った。

「ふむ。ご苦労、外してくれ」

男の言葉に、はいはい、と部屋から理逗夢さんと無言で、花菜芽さんが出て行った。

「ふむ。これで話せるな？」

男が、見た目にあわない口調で聞いてきた。

「え、えーと？」

「焦るな。私が質問する」

まあ、フォローしてくれるのは良いんだけど、何かやりにくい。

「刀間君。君は天使と聞いているがそれは本当か」

まじめな顔でいきなり聞いてきた。自己紹介などはないのか？

「ええ、生身の天使ではないですけど、祝福を受けました」

「神の聖裁祝福か？」

「は、はい」

なんか初めてだ。他人に話が合う事って……。

「なるほど。だからここに導いたのか」

その他人は、一人で納得しているようす。

「あ、の。導きって？」

男は、こちらを振り返り、不思議そうな顔で告げた。

「知らないのか？私は、刺殺祝福を受けた、第三階段、紗季月羅伊（さつきまろい）都だ。第八階段の刀間封示（いと）。君を歓迎しよう。」  
第八階段と第三階段。封示は、久しぶりに聞いた言葉だと分かっていた。

NEXT!!!!!!

## 第五章 八弾戒団八段階

## 第五章

「ここに住むことになりました、水ノ風月鍍です。これからお願い  
します！」

僕の自己紹介に、食堂は拍手喝采。まあ、こんなもんで良いですか  
ね？

その後は、紗季月の先輩にからかわれたり、「飲め！」「食え！」  
の嵐だった。

(お酒は二十歳に成ってから。よい子は真似しないように)

酒とか、無理やり飲まされてた僕に、呆れるように、柚宇既君が話  
しかけてきた。

「月兄。そう言えば、夏槍催って知ってる？」

「へにや？なやにそれ？」

酔っぱらい気味の僕は、聞かれて首を振った。

「おつ。月君は夏槍催知らないのか？」

紗季月三男の体がゴツイ千種<sup>ちくしゅ</sup>辻さんがいつの間にか、隣にいた。

「何ですかー？夏槍催ってー」

「そりゃあ、紗季月家最高のイベント。夏槍催」  
と、柚宇既君。

「チームに分かれて、戦闘不能になるまで闘り続ける。今の訓練内容も、夏槍催に向けての練習だぞ」  
今度は千種迂さん。

「去年は、一日中だったよね？千種兄」

「おうよ。俺のチームが生存したんだぞ」

「でも、夜兄一人だったじゃん」

「ああ。兄貴あ、ある意味無敵だからな」

「ふへ？榎伊都さんってそんな凄いですかあ？」

「そりゃ凄いよ。夜兄、夏槍催の時なんて、俺を含む三人を蹴散らして優勝しちまったんだから」

「兄貴は、拘束技専門のくせして、Gが19って噂だぞ。俺でさえG9なのに……」

「いや、千種兄は近接戦専門だから高いでしょ」

「そうか……。分かってくれるのは柚宇だけだ……。……そう言や、月君はGどんぐらいなんだ？」

千種迂さんがこつちに振り向いた。柚宇既君は期待した眼差しを向けてきた。

「国からの指定で来たんだろ？ここにいる指定された奴は10以上あるよな？」

「うん。婁咬さんとかは、G15って言ってたけど」



「え、居ないんですか？なら何処に」

「理逗夢んとこの、女チームだよ」

女子が固まっている机を指差し言う。

「ほんと、理逗夢の姉貴なんか、今度こそ負けない、ってやる気満々で苛つくんだよ」

「苛つくって……」

「だから！月君が欲しいんだ！来てくれるね！」

千種迂さんが、身を乗り出して急接近して聞いてきた。

「へえ…？良いですけど」

頭をかきながら答えると、ヤッターアアアアア！！と、二人は女子群に走って行き、自慢しに入った。柚宇既君と千種迂さん。なかなか良いコンビだ……？

柚宇既君が、理逗夢さんにローキックを入れられたのは見なかったことにしよう。

何か、柚宇既君と千種迂さんが、ボコボコにされてる。二人共、ゴメンナサイゴメンナサイチヨウシニノツテマシタゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……を連発してる。む、惨い……。

と言う訳で二人を置いてき、酔いより恐怖を覚えて部屋に帰った。

N E X T ! ! ! ! !

第六章 魔力解放

## 第六章

何の違和感も無く、顔を洗い制服を着る。場慣れはかなり早い方だ。

柚宇既君と一緒に食堂に向かうと、既に食べてる人が何人か居た。朝稽古かなんかあったんだろう。

「あつ、そうだ。今日は、実践訓練があるから、十九時までには帰ってきてくれ。夏槍催のシュミだから」

柚宇既君が揚げパンをほうばりながら言った。朝からカロリーたかないなあ……。

そんな柚宇既君を、パンを食べながら眺めていたら誰かがコツチに書いてきた。

花菜芽さんだ。

「よかったあ。月君まだ居た。コレから学校ですよね？一緒に行きませんか？理逗夢さんも一緒だよ」  
うん。やっぱり可愛い。

「あー、助かります。学校までの道を完璧に把握してなかったもので」

「うん。じゃあ第三玄関で待ってるますから」手をヒラヒラ振り行ってしまった。なんか、紗季月家の女性って皆顔立ちが良いような気がするけど……。

「花菜芽さん良いよなあ……」

ハア、と柚宇既君がため息を付いていた。そりゃあモテるよなあ。

「早く行ってやんなよ。待たせちゃ悪いだろ」

「はああ？」

あまりにも突然だった。柚宇既君の口からそんな言葉が出てくるとは。

「ちよつ、別に花菜芽さんに惚れてるわけじゃないからッ！！俺は心配したからだなあ……………」

僕の視線に気づき、慌てて言い訳を初めた柚宇既君の言葉を遮り、頑張れよ、と肩をたたき第三玄関に向かった。

第三玄関があるぐらいなんだからこの豪邸、半日あっても部屋巡りは無理だろう。敷地内にバカでかい裏山なんか在るんだから……………。

そんなわけで女子高生二人と登校だ。

ちなみに聞いた話二人は親友らしい。まあ、義姉妹だもんねえ。

「それで、月君は第二チームなんですか？」

二人に疑問的な目線を向けられた。

「えーと、千種迂さん達の所ですけど」

「やっぱり千種兄ね。」

はあ、と理逗夢さんが肩をすぼめた。

「ホントです。先を越されました」

花菜芽さんまでも肩をすぼめた。

「へ？」

何の事を言ってるのかが分からない。  
すると、理逗夢さんが、

「あんだ達の模擬戦っていつ闘るか聞いてる？」

「あつ、はい。聞いてます。今日の七時です」  
素っ気なく答えると、理逗夢さんと花菜芽さんは、笑みを浮かべた。

「これで、月君と闘れそうです」

「へ？」

「今日の模擬戦が楽しみです」

「そうね。お互い頑張りましょう」

今日の模擬戦は危険な感じがします。

色々あつて放課後。

超能力捜査研究科で、顔合わせが終わった後（男子の割合がかなり低かった）時計を見ると、五時半を指していた。  
やることが、特に無かったし、早めに帰りたかったので、帰ろうとしたら、あいつがいた。

不羈茨打が。

茨打がコツチに気づくと、こつちに来いと手招きした。前と同じ眼帯を付けている。

「やあ。封示???いや、月鍍君」

「一体何のようですか」

ぶつきらぼくに聞くと、意外な答えが帰ってきた。

「八弾戒団のことは知ってるよな?」

八弾戒団。殺害悪魔集団。

「……………知ってるよ」

「ああ。知らないわけ無いよな。聞いた話だが、第八階段の刀間が、第三階段の紗季月羅伊都に接触したらしいな」

「悪いかよ…」

「いや。全然。お前は、聖裁聖戦に参加する手はずで良いんだな?それを聞きに来ただけだ」

「つち。ああ。羅伊都さんと決めたからな」

「ふん。良い選択だと思うぜ、第八階段」

鼻を鳴らし、校舎に戻ろうとした茨打が何かを思い出したのか、こつちを向いた。

「言い忘れたが、俺は第八戒団だ」

そつちに残し、校舎に戻っていった。これで、聖裁聖戦の舞台役者が揃った。

N E X T ! ! ! ! !

第七章 七对七模拟战

## 第七章

「えー、急遽第三チームとの模擬戦となりました。人員配置は、紙に書かれてる通りです」

僕が着ている赤と黒のユニフォームには、1、と書かれてある。配られた紙には、第二チームの構成人名が書いてあった。

一番 水ノ風月鍍 監視対象者

二番 紗季月柚迂汰（五男）

三番 紗季月粉祢弧（六男）

四番 疋田虚宇監視対象者

五番 紗季月千種迂（三男）

六番 弥気憐監視対象者

七番 紗季月柚迂既（四男）

現場監視者 紗季月柚迂都（次男）

構成メンバーはこんな感じだ。ややこしいって？気にすんな。

「月鍍君。宜しくね」

まず、話しかけてきたのは監視対象者の弥気憐。スキル、凄くイケメン。十九歳

「こちらこそ。お願いします」

まあ、礼儀には礼儀で返さないとね。

「ねえ。月鍍君のメイン武器、教えてもらって良い？」

「はい。メインは、雷による雷刃で、サブが、地による圧縮盾です」  
「ふーん。成程。君の実力は聞いてるよ。椰伊都さんだけに、君は集中してくれ」  
「じゃないと全滅だ。と憐さん。」

「分かりました。体形警戒態勢はどのくらいで？」

「僕の魔法獣を這つとくから、多少は持つけどね。椰伊都さんだからねえー。警戒は一応」

憐さんの言葉に、了解しました。を返す。

今は、六時五五分。五分後、密林地帯に（紗季月の私有地。確実に道に迷う）突入する。

突入体形は、集団突入。主に、椰伊都さんの分散部隊を無力化するためである。

ちなみに、僕の装備は対魔力ユニフォームと、ジェリコ、41・A E弾丸三倉、予備のアミーターナイフ。そんな感じた。

柚迂既君も、ユニフォームで、両手に薙刀と言う装備。両手に薙刀って珍しい。

千種迂さんは、強甲手装にカスタムナイフが、甲の部分に取り付けられていた。ホントに格闘専門みたいだ。

「まあ、夏槍催はこんな感じだからさ。今の内に慣れときなよ」  
強甲手装で、僕の背中をガシガシと叩いた。痛い……。

「前線は俺が守るから、部隊発見後の奇襲は月兄、ヨロシク」

「え、僕一人？」

ちよっと待て。土地勘のない奴に奇襲を任せるのはどうかと思うが……。

「あー、それなら平気。コイツがいるから」と、隣さんが召喚した、トカゲ型魔獣（狼ぐらいデカイ）を指指した。

その、紅いトカゲを見て、安心はできなかった。

「おい。第三チームのメンバーが割れたぞ」

コウさんこと、足田虚宇が手にプリントを持って走ってきた。

プリントには、こう書いてあった。

- 一番 紗季月理逗夢長女
- 二番 紗季月花菜芽義次女
- 三番 狭奈麻奈監視対象者
- 四番 紗季月等魅堵四女
- 五番 紗季月奈花芽義三女
- 六番 紗季月柳伊都長男
- 七番 紗季月魅袖迂五女

現場監視者 嶋蛇遊馬監視対象者

「夜兄と魅袖迂が組んでそうですね……」  
袖迂既くんとは、真逆の性格の袖迂汰君が、興味深そうに言った。

「魔力結界師（魅袖迂ちゃん）と拘束師（椰伊都さん）か……」  
憐さんは、深刻そうな顔で言う。

「月兄一人じゃキツいんじゃない？」  
と、袖迂既くん。そんな気にしてなさそうだ。

「そうになると、椰伊都さんは月君が請けるとして、魅袖迂をどうするかだな」  
隣でコウさん。

「なら、魔獣使いの俺じゃないか？時間もないし、それが一番良いと思うけど」  
憐さん、やる気満々だな……。逆に不安なのは気のせいかな？

「そうだな、時間もねえし。突入ポイントに行くか」  
千種迂さんの一声で、全員が装備を持ち、密林地帯の入り口に構えた。

「よし。いいなあ。速度は俺に合わせろよ。では、十九時一分に集団突入体形で夏槍催、模擬戦を開始する！」  
千種迂さんの掛け声と同時に、憐さんの魔獣が闇に駆け込み、部隊はそれを音無く追い闇に包まれて行った。

N E X T ! ! ! !

第八章 二对五模拟战

## 第八章

「魔獣の反応が薄れました。敵部隊を発見したと見ます」  
西洋険を構えた憐さんが、マイク越しに言った。

「了解。部隊警戒態勢にはいる。月君と憐さんは奇襲に向かってくる  
ださい」

千種迂さんに指示された通りに、憐さんについて行く。  
憐さんには、魔獣の位置が分かるのだ。

それから、三分もかからないうちに、魔獣と、敵部隊を発見した。  
草越しから見てるため、まだバレテナイ。

「どうします。攻撃掛けますか？」  
横で、魔獣を撫でている憐さんに話しかける。

「ああ。月君が正面から仕掛けてくれ。俺が後ろから、打つ」

「了解です。今分かったんですけど…椰伊都さんと魅袖迂ちゃんが  
居ません……」

「……………。あちゃー、千種迂のところに引っちゃったかー」

「……………」

「まあ、平気ですよ。袖迂既と千種迂がいるから」

「……………はあ？そんなもんでしょうか？では、奇襲を開始します」  
決めゼリフを言った後、憐さんと別れて僕は、前の方に詰め寄る。

しかし、ミスった。

「敵部隊員発見！拘束に掛かる！」

僕の方に楔が飛んできた。ウネるようにして。

それを、圧縮盾で受け流し、雷刃の双剣に切り替えて、切りかかった。

狙うは、部隊主戦力、理逗夢さんだ。

「??ツ！」

振り下げた雷刃は止められていた。対電流仕様の楔に止められて。

後ろに退くが、花菜芽さんの追撃。氷と鉛玉の嵐。

それも、出現させた圧縮盾で防ぐ。

「でええええやツツ！」

雷刃を構えた瞬間に、狭奈さんの二槍が、脳天目掛けて振り落ちてきた。

瞬間的に踵を解して、勢いを使い槍の持ち手を蹴り落とす。

吹っ飛んだ槍は、両方木に刺さり当分、抜けそうにない。

素手になった狭奈さんは、両手を構え、水の魔力を発生させていた。言うまでもない。

水は雷を防げない。

雷刃を受け止めようとした圧縮盾は、無惨にも破壊され、狭奈さんは、電流の勢いで、後ろに吹っ飛び気絶した。

後ろに迫っていた、奈花芽さんの刀は、後ろ回し蹴りで吹っ飛ばし、怯んだ体に雷撃を一発。即、後ろに退け帰り気絶した。

残るは、楔使いの理逗夢さん、氷弾使いの花菜芽さん、格闘魔法術使いの等魅堵ちゃん。

「さすが月鍔。狭奈さんを戦闘不能にするなんてねえ……」  
自己流の雷刃の構えかたで威嚇するが、効果は無いらしい。

「でも、三人同時は無理でしょッ!!」  
後ろから楔が飛んできた。

その楔は、僕の圧縮盾を出す左手に絡み、氷に凍らされた。腕が動かない。

動けない僕に、等魅堵ちゃんが、白い魔力を宿した拳を構えて、一気に駆けてきた。

バチイイイイイイイン！！

凍った楔にぶら下がるようにして、雷を纏った足で繰り出された足刀横蹴りと、白い格闘用の魔力を纏った拳が守るようにしてぶつかった。

防御態勢だったにもかかわらず、拳の魔力は薄く、空气中を散り、身体ごと後ろに吹っ飛ばした。否、敵部隊を中心に業火が舞った。

憐さんの魔獣だ。

その業火の中から憐さんが、剣を構えた状態で飛び出してきた。

一番闘りやすいと思ったのだろう。吹っ飛ばされた等魅堵ちゃんに、追撃を仕掛けていた。

僕を拘束していた楔は、溶けていた。おかげで動けるようになった

が、重度の火傷を負ってしまった。

魔獣は、理逗夢さんを引き留めてくれていた。

僕の前で構えているのは、花菜芽さん。

花菜芽さんの凍刃は片方のみだったが、移動速度が思ったよりずつと速かったので雷刃に電流を流すことができず、受け流すことが出来なかった。

「さすがです、月君。夜兄が警戒するのが分かります」

戦闘中に、笑みを浮かべて話しかけられた。周りの炎と異様に合っ  
ていて、まるで妖精みたいだった。

「花菜芽さんこそ刃魔力を使えるなんて、凄いじゃないですか」  
僕も笑い返した。

すると、僕の顔を見て花菜芽さんは、頬を赤らめ恥ずかしそうに答  
えた。

「か、片方だけですけどねッ。行きますよッ」

そう言うと、いきなり上から斬りかかってきた。

花菜芽さん。切り替え速いし、足も速いなあ。

そんな下らない事を考えながら、駆けてくる花菜芽さんに雷刃を構  
える。

「えッ!？」

知らない業が、自分に迫って、危険を察知したのだろう。花菜芽さ  
んが悲鳴をあげた。

蒼を纏った、尖雷撃を見て。

そう。彼女は刃魔力を使っても上級魔力は扱えない。双剣技術もそうだからだ。

吹っ飛んでスタンアウトした花菜芽さんは木にぶつかり凭れた。

周りに目をやると、憐さんと魔獣が、理逗夢さんと交戦していた。等魅堵さんはクリアしたんだろう。

応戦しようとしたら、尖楔にぶち当たり、魔獣が悲鳴をあげながら消滅した。

悲鳴に怯んだ理逗夢さんの後頭部に、僕はすかさず両手を組み合わせせ電流を流した拳で、おもっいきり叩きつけた。まあ、軽い脳震盪で済むだろう。

憐さんと目を合わせ、喋りかけようとしたら、来た道より手前のほうで、爆発音がした。

NEXT!!!!!!



## 第九章

爆発圏に着いた頃にはすでに、柚迂既君と千種迂さんが、椰伊都さんと魅柚迂ちゃんが戦闘していた。

「でえええやあああッ!!」

片手を楔で封じられているのに千種迂さんの強甲手装が繰り出す破壊魔法は、途轍もない衝撃波を生み出していた。

しかし、対する椰伊都さんは、衝撃波を難無く、手に持っていた刀で引きちぎった。椰伊都さんが優勢のようだ。

その隣の柚迂既君と魅柚迂ちゃんは、柚迂既君の方が劣っている。

「憐さんは柚迂既君を頼みます！僕は千種迂さんを援護します！」

駆けていき、後ろから切りつけたが、てっきり気付いてないと思っ  
てしまい、力を込め身体を無防備にしてしまった。

「しまっ……!!」

悲鳴を上げるが遅かった。

千種迂さんを拘束していた楔が解け、僕の身体にめり込んだ。

「げふうっ!!」

い、痛ええ!!!!

椰伊都さんは標的を僕に変え、思いつき駆けてきた。よ、容赦な

いなあ……。

僕も雷刃を構え突撃した。

椰伊都さんの刀と、僕の雷刃が鈍い音を立てて重なる。雷刃に、グツと力を込める。

椰伊都さんはこの連結を見たことがない。否、知らない。

僕の企みに気づいたのか、ハッと顔を上げるが、遅い。

刀越しに強力な電流が流れた。

と、同時に手から煙を出しながら刀から手を離し、椰伊都さんが後ろに退け逸れた。スタンアウトしないところを見ると、どうやら刀の持ち手が和らげてくれたのだろう。

おもっいつきり、力を込め雷撃をくりだしたが、他の人のようには行かず、大地から轟音を出しながら、突き出した壁に妨げられた。えッ……！大地の圧縮盾！？

椰伊都さんの魔力に驚いてると、雷撃に耐えきれなかった壁が、一気に崩壊した。

動揺してた僕は、上から降ってきた岩壁に気付かず、意識は飛んでいった。

起きたら、夢落ちを期待したが、そんな都合は良くできてない。ベッドに寝ていた。

目の前には魅柚迂ちゃんが、僕のベッドの上に顔をもたれて寝ていた。

「あ、れ……？」

思考回路が良く回らなくて、物事を捉えられない。

その言葉に、魅柚迂ちゃんが反応して勢い良く顔を上げて起きた。

「起きた！お兄ちゃん！」

魅柚迂ちゃんは、なぜか僕だけを「お兄ちゃん」と、限定して呼ぶ。だけど、僕はそっち系の趣味は持ってない。

「えーと……？」

「昨日の模擬戦は引き分けだよ！」

嬉しそうな顔で説明する魅柚迂ちゃん。その仕草が、とても可愛らしい。

「えーと……何で？」

「千種迂は体力切れで、夜兄は魔力切れ。柚迂既は私の結界で昏睡、私と憐は魔獣の自爆に巻き込まれて」

魅柚迂ちゃん。呼び捨てで呼ぶんだ……。

「僕は何で？」

「覚えてないの？お兄ちゃん、岩の下敷きになる前から気絶してたよ？そんなお兄ちゃんの為に私が、魔力で守ってあげたんだよ！」  
えっへん、と胸を張る魅袖迂ちゃんは、ほめて、ほめてと言わんばかりに僕を見つめる。

「ああ。守ってくれてアリガトな、魅袖迂ちゃん」と、軽く髪を撫でてやる。

なでると、物凄く気持ち良さそうな顔をしながら、頬を赤く染めて、「はあうう」とか、訳の分からない声を出している。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、もう一つお願いが」  
頬が赤いまま聞いてきた。

「ん？」

「眠いから、お兄ちゃんと一緒に寝させてください」

「ハッ!？」

いや、いくら何でも十歳の中でも比較的背が低い、女の子と寝るのはさすがにマズいだろ！

「じゃあ、お構いなくう」

「ハッ！」

お構いなくじゃねえよ！てか、もう横に倒れてやがる！

「ちよっ、魅袖迂ちゃん……それはマズいんじゃないかな……」

「平気」

何か、ノリノリで返された……。

そんな魅袖迂ちゃんは諦め、背を向けようと寝返りを打とうとしたら、思いつきり背中に抱きつかれた。ビククリして後ろを見ようと顔をうかがったら、

「……お兄ちゃん、もう行かないでよ……ムニャ」

と、とびきりの寝顔で呟かれた。

何も言う気を失い、背中の柔らかな感触を微かに感じながら、意識は遠ざかっていった。

NEXT!!!!!!

第十章 天使支援協会

## 第十章

起きたら早速、理逗夢さんが仁王立ちして怒っていらっしやっただ。

「えーと、理逗夢さん、どうしたんですか……?」

「何で魅袖迂が寝てんのよ。あんたの部屋のベッドでハッ、そうだった。すっかり忘れていた。今も、背中側に抱きつかれた状態だ。」

「こ、これは、魅袖迂ちゃんが自分で……」

「ふーん。それを受け入れた訳ね」  
う、受け入れたって…。

「い、いや、僕の看病もしてくれたみたいだし、眠そうだったんで」

「もういいわよ。妹の恋愛関係なんて知ったこっちゃないから」  
いや、知つとけよ……。

「……………。理逗夢さんは、どうしたんですか」

「私は魅袖迂がいつまで経っても月鍍の部屋から帰って来ないから、様子を見に来ただけよ。その様子なら寝かशीた方が良さそうだしね。じゃっ、私は行くわね」

ドアノブに手をかけた理逗夢さんが、思い出したみたいにコツチを振り向いた。

「それと、魅袖迂のそんな幸せそうな寝顔、久し振りよ」

そついい残し、部屋から出て行った。

時計を見ると、二三時を指していた。我ながら結構寝たものだ。とか言いつつ、四時間しか実際寝てないし、やけに疲れていたもので、自然に眠ってしまった。

深夜三時。空腹のため起床。

相変わらず魅袖迂ちゃんはガツチリと、背中に抱きついていて。その腕を、そつと振りほどき、電気を付けて軽く伸びる。

冷蔵庫の隣に置いてあったメロンパンを取って、早めの朝飯を食べようとしたら、さっきまでグッスリ眠っていた魅袖迂ちゃんが起きた。まだ、寝させておいた方が良いのか？

「ん、お兄ちゃん？」

目をこすりながらフラフラと歩いて来て、僕の隣の椅子に座った。

「あー、おはよう魅袖迂ちゃん。早いけどパン食べる？」  
二つ持ってきたメロンパンの片方を渡した。

「ンニヤ？食べるー！」  
眠気が一気に覚めたみたいで、パンをガツガツ食っている。  
夕飯食べてないもんなあ。

僕も食べ終わり、僕の事を見つめていた魅袖迂ちゃんに話しかけた。

「魅袖迂ちゃん。自分の部屋に戻らなくて良いの？自分の部屋の方がくつろげるでしょ？」

「うん。平気。お兄ちゃんが一緒の方がくつろげるもん」  
無邪気な顔で答えられた。

僕はくつろげないよなあ。そりゃ、自分の部屋に十歳の小さい女の子がいたら誰だってそうだろう。

そんなわけで、時間になるまで魅袖迂ちゃんと喋ったり、邪魔されながら武器のクリーニングをしたりして時間をつぶした。

そして、今は学校をサボり、羅伊都さんに連れられてある協会も前に立っている。

『天使支援協会』

羅伊都さんに教えてもらい、ここまで連れてきてもらった。

「ここに奴らが住んでいる。戦闘中じゃなければ居るはずだ」  
そう言っって、きしむドアを開けた。

そこに立っていたのは、紛れもない人間みたいだったが、どこか神秘的なオーラを放っている少女と男性だった。

NEXT!!!!

第十一章 第六階段

## 十一章

「お待ちしていました。第八階段の刀間封示さん」  
修道衣を纏った女性が、僕に一礼した。  
訳が分からずに僕は慌てて一礼を返した。

「ほう。噂に聞いていたが、それ以上に若いじゃねえか。礼儀もな  
つてるみてえだし。気に入った」  
大刀を肩に置いている男性が言った。  
こっちは、洋風甲冑を着ている。

「おい、ミマタ。咬瞬の回収はどうした。頼んでおいたはずだが」  
羅伊都さんが言った。咬瞬、不羈莢打がもっていた危険武器。

「おうよ。今、行ってきたとこなんだが厄介なのがもっててなあ。  
殺実<sup>キレ</sup>に報告してたんだよ。その途中でアンタ達が入ってきたってわ  
け」  
ミマタと呼ばれていた大刀の持ち主は、長く伸びた髪をイジリなが  
ら言った。

<sup>バックバイター</sup>  
咬瞬の持ち主。

「厄介なのって、不羈莢打ですか？第八戒団の」  
僕の言葉に二人が僕を見つめた。

「刀間封示。なぜそれを知っている」

「ミマタしか交戦してないはずですが」

連携で質問してきた。コレには正直に答えるしかない。

「実は、前までそいつに狙われていまして。一回闘ったんですが狩り斬れず、不注意で相討ちに終わってしまいました。片目は潰せたみたいなんですけど……」

「まじかよ……。俺なんか片腕持って行かれて、からがら逃げて来たんだぞ……。まあ、通りで眼帯をしていたわけだ」  
そう言い、既に無くなってしまい、機械化した左手を晒した。

「それが本当なら、ほっとけない存在ですね。人形を送っておきます」

殺実と呼ばれたシスターが、真剣な顔で告げた。  
彼女はどうかやら、人形遣いのようだ。

「うぬ。コッチからも調査しておこう」  
うなずきながら羅伊都さんが言う。

調査するのって、袖辻既君とかかな？

「まあ、その話よりも、第一階段の行方だ。あの野郎、サブラム如きに吹っ飛ばされやがって。撤退しか出来なくなっただよ。あの野郎……」

「……………」  
サブラム・クライム。その名は有名で、八弾戒団の三弾目。確か、スキルは剛力だった。

「まあ、墜ちたのは長野辺りだろう。高度五十メートルぐらいの墜落では死なないだろうしな」

「あの、第一階段って……………」

「ああ。君は知らなかったよね。第一階段は、とびゆた鳶由羽蛇だよ」

「ああ。由羽蛇さんが……………」

鳶由羽蛇。スキル、絶対防御力。

由羽蛇さんには、以前からお世話になっている、あ 庵ついでにーさんだ。

「話すことは話した。俺は第一階段をさがしにいつてくらあ」

「はあ……………」

僕が、適当な返事を返すと満足そうな笑みを浮かべて、ミマタさんは僕達が入ってきたドアの方に歩いていき、

音無く

静かにあ 庵かに目敏く

騒々しく

愛しく

哀しく

虚しく

悲しく

優しく

疚しく

易しく

厳しく



「刀間君。奴に浸るな」

そこで、僕はハッと、我に返った。

そこで、確信が得れた。

ホマノルト・ミナイダ・M・タイセレード

#### 第四階段

スキル、幻覚幻聴幻影喪心脳内操縦。

彼だけと言っていていいだろう。

聖裁聖戦ゆういつの精神的攻撃力専門の天使だ。

直接手を加えないで『狂』にする。莢打がどうやって闘ったのかは分からないが……。

「では、私の紹介といきましょうか」  
修道衣の女性が言う。

「第六階段、人形遣いの抹<sup>まつ</sup>殺<sup>せつ</sup>深<sup>しん</sup>です」  
腰に装備してあった、無数の刃を一本一本の指に、一つずつ挟みながら言った。

「不羈莢打が接近しています。迎撃準備を。損傷は覚悟してください」  
真剣そのものの顔で、殺深さんが白い髪を揺らしながら告げた。

僕と羅伊都さんは、言われたとおりに身構えるしかなかった。

「????? 聖戦を開始します」

NEXT!!!!!!

第十二章 聖戦旋討

## 十二章

「あつれー。ミマタの奴どこ行きやがったー？」

「……………」

「おーい。無視しないでくれないかな？」

「……………」

「…、うわっ！いきなり仕込み刃振り回すなッ！」

まあ、それには賛成だけど、相手がアンタだからねえ……。殺深さんの援護が的確だろう。

「ちよっ、まっ……………」

刃の迎撃にすかさず、勢い良くホルスターから出た黒と白のDE。よく、両手でもブレが凄いで物を片手で扱えるな……。流石はSラック武偵。

「チッ。話し合いじゃ済まないか……………」

弾丸で攻撃を避けた莢打の口が告げた。

???????? 奴が来た

前回闘りあっただけあって、次の行動は予想できた。

協会が焔に包まれる。

必死に構えた圧縮盾が軋む。

八弾戒団、不羈茨打の魔力解放。

「解放する。神の指令にかけて解放する。解放する。友の死にかけて解放する。解放する。刀間の裏切りにかけて解放する！！」

双方の手に、双剣が出現する。

雷地野ノ大蛇らいぢののおろちびと雹氷堯ノ大蛇ひょうこりたかのおろちび。

対するは、漆紅の咬瞬バックバイターの二双刃。

「けはは。反魔力解放対魔力解放戦か。二十年ぶりだな」  
けはは。と笑って返す。

「その、咬瞬。回収させてもらうぞ!!」  
羅伊都さんが悪魔に、いつの間にか出現させた薙刀を片手に詰め寄る。

「紗季月か……………!!!!!!」

一瞬何が起きたか理解できないほど、紅い閃光が散った。

「うがッ!?!」

くらったのは羅伊都さん。悪魔の火炎弾を薙刀で避けたが、バックバイターの二撃目に当たった。

「っあああ!!」

羅伊都さんの上を飛び越え、二太刀を構え、斬りかかる。

バックバイターで防御された刀の所目掛けて、雷足刀をかます。  
見事に当たった。

悪魔は、雷の衝撃に耐えきれず後ろによろめいた。

そこに、殺深さんの追撃。

殺深さんの剣捌きは尋常じゃないほど軽やかだった。しかし、悪魔は身を捻るようにして、それをかわした。

先をよんで、殺深さんに振り落とされたバックバイターを雷地野ノ大蛇で受け止め、もう片方の雹氷堯ノ大蛇で悪魔に斬りつける。

「ったく。もうちょい殺りたかつたんに……」  
いきなり敗北を察したのか、斬撃をかわし焔に消えていった。

安心感に襲われたのか、殺深さんが、焦げた床にペタンと座る。

羅伊都さんは、まだ倒れたままだ。意識はあるけど。

「大丈夫ですか？」

床に座り込んでいる彼女に手を差し出す。

殺深さんは手を握りながら言った。

「反魔力解放の遣い者。刀間一族の『対天使改造悪魔』その十二代目が不羈茨打かもしれませぬ」

本日二度目の、殺深さんの名言がコレだった。

N E X T ! ! ! ! !

十三章 あくまで健全な高校生？

## 十三章

『対天使改造悪魔』

言わば墮天使を強化、改造した『反天使改造天使』と言う悪魔。

それは、強力な魔力を持ち、元々天使だったときのスキルを持ちそろえており、墮ちる前に記憶されていた、他スキルも取り込んでしまふ。否や、強力な全天使の『クローン』

ただし、実験台にされた天使の内、成功した天使は『一』  
五千三百六体中、一体

それが、対天使改造悪魔『不死の鬼神』

その、成功個体を拘束するのに、歴代の大天使などを使っても、おさまる気配はなく、最後はゼウ・クシイと言う暗殺部隊により弱体化に成功。

と、殺深さんが言っていた。

「僕がですか？」

聖戦戦闘の翌日。

二時間目の休み時間、クラスの子三、四人に囲まれて困っていた。

「そう、そう。今度のアドシアードのチアで、マネージャーやってくれない？」

と、アドシアードとか言う、変なイベントで開催される、チアリーディングのマネージャーになれ、と迫られてた。

「いや、何で僕なんですか、他の男子に頼んだほうが早いと思うんですが」

「月君だと、私たちの持ちベーションも上がるし、観客の人にも受けれると思うから。ね？一緒にやる？」

ちよつと花菜芽さんまで、一緒になに言ってるんすか。

僕まで踊らされる事に、何かなってるし。

「うん、絶対良いと思うよ。先生にも、月鍍君を誘えって、頼まれたいから」

クラスで、花菜芽さんと並んで、美少女ランキングNO.1の「藤ふ沢早苗じさわさなえ」さんも、身乗り出して誘ってくる。

てか、先生の指名かよ。断り切れないじゃないか……。

「先生の指名ですか……………」

「そ、アドシード責任者の伊藤先生直々の」

「それじゃ、断り切れないじゃないですか……………」

「まさか、やってくれるの!?!」

目を輝かせ始めた目の前の女子たち。花菜芽さんまで、何してるんすか……………」

てか、伊藤先生。優しそうな女先生かと思っていたのに、こんなにも残酷な行為を、ノコノコ……………」

「先生の指名なんでしょう……………。やるしかないじゃないですか……………」

……………」  
そこで、喜びが爆発したのか、教室で意味不明の悲鳴を上げながら、廊下に駆けていった。

転校生とはこんなに辛いのか……………。

どうやら、クラスのアホな女子たちは、チアの先輩がいるクラスに僕がマネージャーをする事を、報告しに行ったみたいだった。

どう考えても、まずは次の授業の準備だろ……………。

「さすがだな、月鏡。男子で、アドシードチアリーディングの男子マネージャー何て、今回が初めてだぞ」

呆れ顔をしながら、廊下を見ると、隣の「河西悠生」かさいゆうせいが話しかけ

てきた。

こいつの方が、チアに向いてんだろ。イケメンだし、スポーツ出来るし。

一応、学校の中では一番の男子友達。ゆういつの常識人だし………

「悠生がやれよ。お前の方が向いてんだろ」

「月鍍にやあ、負けるよ」

「はあ？お前の方が絶対良いだろ」

と、正直に言っていると、呆れ顔をされた。

「お前知らねえんか？月鍍のファンクラブが、お前が転校してきた翌日から結成されてたんだぞ？」

「は？」

「水ノ風月鍍好きクラブ。体操着姿の写真は五万円で取り引きされてるぞ？」

「……………は？」

「チアの衣装写真は、流出度が高いが、コスプレのため、三十万円相当と予想されている、と言ってたぞ。クラスの女子、大半が」

「はあ？きもちわるっ！」

「あれ？授業中に、写真撮られてるの気づいてなかった？」

「まじかよ……………」

その後の授業は、受けなくても平気と言われているが、さすがに聞かないとまずいので、一応聞こうとしているが。気づいてしまった、視線にガチゴチになりながら、全く授業にならなかつた。

N E X T ! ! ! ! !

#### 十四章 マネージャー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4025v/>

---

～ 武偵高～ 眼帯の紅

2011年8月27日18時36分発行